

# 二十五年ぶりの教育実習

—イギリス公立幼稚園保育参加顛末(3)—

豊田 一秀

私は、許されてイギリスの公立幼稚園の保育に参加する機会を得た。保育の場に参加すると言っても、私の場合、一週間に一度程度の頻度であるし、当然の事ながらスタッフとして参加する訳ではない。職員の責任の伴わないという意味で自由な、そして不安定な立場にあつて、どのような参加の仕方をすれば幼稚園の生きた全体像がつかめるのか、私は自分の動きにつ

いて幾度となく考えさせられた。これは参加観察という方法の質と内容の問題である。

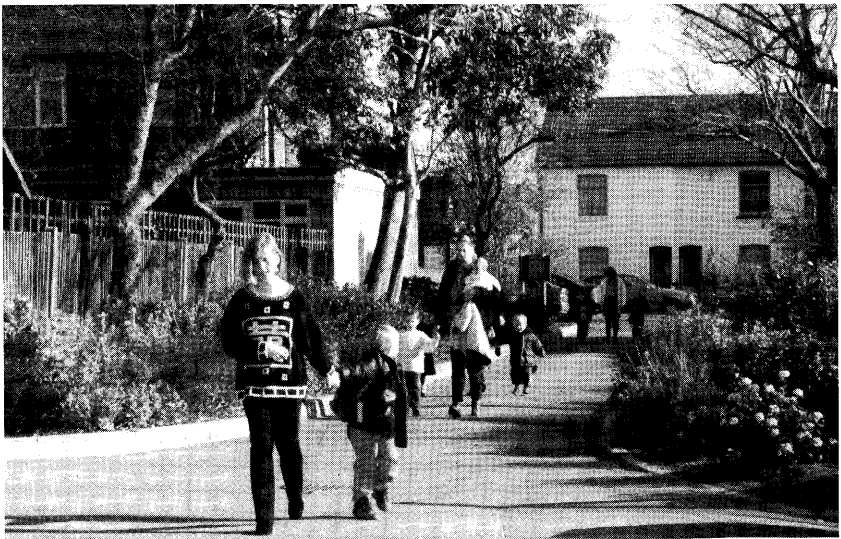
どのように参加するのか

参加観察を始めた当初、次のようなジレンマを感じた。それは、子どもと過ごせば保育者が、保育者と過ごせば子どもが、それぞれ見えなくなってしまうとい

う問題である。すなわち、ある特定の子どもと長く過ごすせば、その子どもとのやり取りを通じて、その子どもとの内面を含めたある程度の洞察を得る事は出来るであろう。しかしこの場合、保育者の意図や行動の流れについては分かりにくくなる。

また逆に、アシスタントとして保育者と行動を共にすれば、その日一日の保育計画の流れや、保育者の行動と考え方、感じ方がある程度把握する事は可能であろう。しかし、その場合の理解は保育者サイドに立ったものになりやすくなり、さらに、保育者と関係の薄かった子どもの事については、まったく理解を欠いてしまう事になる。以前にも述べたように、この幼稚園は複数の保育者が一クラスを運営しているので、各保育者がクラス全体の子どもを把握しようとする意識は薄いのである。

しかし、時が経過し、参加の回数が多くなるに従って、当初の悩みは発展的に解消されていった。何故なら、このような二律背反的な参加方法以外の方法に行



▲朝の登園風景、お母さんと手をつないで

き当たったからである。それは保育現場の空気や求めに私自身が流されてみるという一つの在り方である。

少し言葉を足せば、それは私の意志を中心に自分がどのように過ごしたい、何を知りたいと自分の行動を決めようとするより、自分が現場の保育者や子どもに扱われるままに動くと、「受け身」的な在り方である。「扱われるままに応じる」という事は、保育者や子どもの求めや望みにそのまま応じるという意味も含んでいるし、時には逆に、相手に制止されたり拒否されたりした場合にはそのままに、その制止や拒否を受け入れるという事でもある。対象が大人であれば、また子どもであれ、否定も含めて、相手が私に求め、望んでくる、その在り方全体の中にその社会（この場合は幼稚園）のトータルな一つの姿が見えてくるという事に気付いたと言えるであろう。

### 保育者の役割と冠作り

例えばこんな事があった。それまで子どもと自由に

遊ぶ事ばかりしていた私に、ある日、担任のK先生が、一つのコーナーを担当してみないかと誘ってくたのである。それは私を信頼してスタッフとして扱おうという印であったと思う。ありがたい事と思つて引き受けさせていただいた。その後も、機会のある毎に私に設定されたコーナーを担当するように誘ってくれた。この事実から、この幼稚園では前もって用意されたコーナーの活動をきちつと子どもに与え、指導する事が教師の仕事の中心として考えられているのだと私には類推された。丁度、逆の事になるが、もし、これが、遊びを中心としている日本の幼稚園であつたら、担任以外の人間が幼児と遊ぶ事を基本的には歓迎せず、子どもと遊ぶ事を特別に許す事で、その人間を準メンバーとして受け入れたサインになる場合があると思う。このように、何を許し、又許さないかというその事柄によつて、保育者が何を大切に考えているのかを暗に示していると考えてみると興味深い。

幼稚園の中の色々な場面で、保育者や子どもたちの

求めや望みに添って自分が動いてみるという事について述べてきたが、そのように私が対応しようとする中で強く感じた事がある。それはイギリスでは子どもから保育者へ向けての要求が少ないという事である。具体的例を挙げれば、子どもが保育者のそばにいうとする事、保育者を遊びに誘う事、保育者に遊びに必要なもの作ってもらおうとしたり、手伝ってもらおうとする事、必要な材料を用意してもらおうとする事、等が私の勤めていた幼稚園と比較して非常に少ないように思えた。中でも強く印象に残った事は子どもが保育者を追わない事である。私の、日本でのクラス担任の経験では、特に幼児が安定しない年度初めなどの頃には、保育中に片時も保育の場を離れられない程であったが、この幼稚園では、園にまだ慣れていない時期においても保育中に保育者が他の仕事のために居なくなっても子どもは平気である（もともと、誰か大人は保育室に居るのだが）。

これは限られてはいるが、私の見聞したイギリスの

幼児教育全般についても言えるように感じられる。理由として、子どもが、安定しているからなのか、満たされているからなのか、子どもがまだあまり周りが見えていないからなのか、自分らしさを発揮していないからなのか、自分を常に受け身にする事に慣れているからなのか、保育者を安全基地として捉えていないからなのか……。これが、もしもイギリスの子どもにある程度共通した現象だとするならば、これは文化の型とも捉えられるような一面を含んでいて、簡単に答えが見出せるような問題ではないのかもしれない。

イギリスの子どもに対して感じたこのような違いを確かめるべく、私は子どもにも応えよう、誘われやすいように存在してみようと考えてみた。例えばこんな風に……。

ある日、女兒のBが一人でお姫様風の長いドレスを着て遊んでいたので、私は紙で簡単な冠を作ってやった。Bは嬉しそうにそれを受け取ると、降園の時までかぶっていた。Bはどちらかと言えばおとなしい子ども

もで、発音が明瞭でないという理由で特別な個人レッスンをうけている。確かにBが何と言っているのかわからない事が多い。Bがあまり話さないのも、本人の中にそんな苦手意識があるからかも知れない。そんなBであったが、次の週にクラスに入ると目ざとく私を見つけて、また冠を作ってくれと言う。私は喜んでそれに応じる。私が形を切つて、Bがそれに色を塗るという活動が始まる。二人で作っていると興味を示した男児が二人やつて来る。何をしているのか二人が尋ねると、Bは冠を作つてると答える。僕たちも作りたいたいという事になり、私を囲んで三人で冠作りが始まる。翌週になるとまたBは私の所にやつて来て冠と一緒に作る。他の子どもたちも三々五々やつて来て私と冠を作つていく。Bは一日中私のそばにいる訳ではなく、冠が出来上がると他の遊びに移つていく。そして、忘れずに持つて帰る。こんな事が長く続くうちに、私を見るBの目がとても親しげなものに変わってくる。それと同時に、Bが以前よりおしゃべりになってきたよ

うに感じる。子どもたちは単に冠が欲しいばかりではないだろう。私と一緒に作る事を通して、自分が思った事が体現される事、頼んだ事に応えてもらえる事、イメージしたような物が実際に出来あがる事、友達と同じ時間を過ごす事、友達と同じ物を手にする事等を楽しんでいるのだと思う。

イギリスの子どもも、これまで私が接してきた日本の子どもと同じように私に要求してきてくれた事が私には嬉しくもあり、同時にこの一事がどこか私を安心させもした。雑駁に言つてしまえば、イギリスの子どもたちは、日本で私が遊んでいた子どもたちと少しも変わる所はない。強いて言えば、大人への要求が遠慮がちであると言えるのであろうか。この「遠慮がち」と言う事が、もしかするとイギリスにおける大人と子どもの人間関係の、ある意味での特徴を示しているのかも知れない。

さて、この、私と子どもたちの活動を見ていたイギリスの先生たちは、これをどう評価したのだろうか。



▲友達と一緒に作った冠をかぶりながら先生の話聞く

クラスのK先生、J先生の表情から察するに、基本的にはこの活動を認めてくれていたようである。ただし、それは「楽しそうでよかったわね」という程度の意味であって、遊び時間の一つのお楽しみとしての価値以上のものではなかったようである。

私が子どもと遊ぶ、その遊びの内容をクラスの先生たちにどう評価されるかを識る事によって、逆に先生たちの考えを知る事が出来る。子どもたちと過ごす事が、そのまま保育者の理解にもつながるといふ事を考えた一事でもあった。

(ローハンプトン インステイテュート ロンドン)

客員研究員)